アクティブラーニングを目的とした模擬保育の保育者養成への活用法に関する事例研究

A Case Study on Ways of Utilizing Simulated Childcare for Purpose of the Active Learning for Childcare Training

坂　口　将　太*

Abstract

The purpose of this study was to investigate ways of utilizing a class of active learning for childcare training, as a case study.

Thirty-five female students who were enrolled in a junior college participated in the study. They were divided into groups consisting of 3～4 people. Each group participated in simulated childcare, and then discussed the contents in their respective groups. After the simulated childcare of all groups and the discussions (a total of 10) had ended, the students completed a questionnaire about the simulated childcare and the discussions. The questionnaire items were as follows:

Q1: Comparison of participation attitudes with other classes
Q2: Content concerning the amount of opinions and ideas
Q3: Content on cooperation with others
Q4: Content on changes in participation attitudes in the class
Q5: Content on acquiring new knowledge
Q6: Content on the necessity of this class for childcare training.

As a result, most answers were positive in all questionnaire items. Therefore, this combination showed that the active learning class can encourage students to learn subjectively and interactively. Further, the use of simulated childcare and discussions revealed the possibility that students can contribute to the preparation for practical training from the viewpoint of childcare training. It is therefore recommended to consider classes that provide high quality childcare training.

キーワード：学力の三要素、「主体性・多様性・協働性」、運動遊び、大学教育、質問紙調査

Ⅰ　はじめに

近年、「主体的・対話的で深い学び」が重要視されている。文部科学省は、2014年の中央教育審議会答申[1)]において、高等学校、大学における教育を通じて育むべき「生きる力」を「豊かな人間性」、「健康・体力」、「確かな学力」として示している。その中の「確かな学力」における学力の三要素を捉え直し、「主体性・多様性・協働性」を養うこと、「思考力・判断力・表現力」を育むこと、さらにその基礎となる「知識・技能」を習得することを掲げている。そして、大学教育においては、それらを発展・向上させることが求められている。そのため、大学の授業においても学習者が「主体的・対話的で深い学び」を進めていくことができるよう、様々な学習形態が展開されている。

「主体的・対話的で深い学び」を実現する手段の一つとしてアクティブラーニング[2),3)]が用いられている。アクティブラーニングは、学習者が能動的に学ぶことで認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力を育成していくことを目的としている。つまり、学習において単に知識を

* Shota SAKAGUCHI　聖和短期大学　専任講師

1）文部科学省　2014　新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～　中央教育審議会答申
2）文部科学省　2016　高大接続システム改革会議 「最終報告」 高大接続システム改革会議
3）文部科学省　2016　主体的・対話的深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について　教育課程部会・高等学校部会

得ることだけでなく、得られた知識を活用し学習者自らが新たな知識の創出や知見の発信を行っていくことが求められている。この学びの視点は、日々変化する子どもに対する柔軟な対応力を養っていく保育者養成においても特に重要なものだと言える。

アクティブラーニングには様々な学習形態が存在している[4)]が、保育者養成の中で行われる模擬保育もアクティブラーニングの一つとして捉えることができる。模擬保育は設定された課題について、学生が保育者役と子ども役に分かれて現場さながらに保育を進めていき課題に取り組むものである。保育者役の学生は、課題を達成するための指導案を作成するなどの準備を行い、模擬保育中は指導案の内容を進めながら状況に応じて子ども役の学生と関わっていく。それにより、実際の保育現場へ出る前にシミュレーションを行うことや準備を整えることができる。また、模擬保育終了後、学生間で指導案や指導援助の内容について良かった点や課題となる点についてディスカッションを行うことで、保育者役の学生は自身の行った模擬保育を即時にフィードバックすることができ、子ども役の学生は自身が保育者役となって模擬保育を行う際の参考にすることができる。このようにして、模擬保育は保育者を目指す学生が「主体的で対話的な深い学び」を経験する上で大いに役立つものであると言える。

本研究では、アクティブラーニングの観点から模擬保育およびそれに関するディスカッションを実施し、実施後に学生が学びを得たかや学びに対する態度の変化を事例的に検討することで、保育者養成におけるアクティブラーニングを目的とした模擬保育の活用法についての示唆や知見を得ることを目的とする。

Ⅱ　方法

1．調査対象

対象者は、保育を専攻する女子短期大学生で「体育」の授業を受講していた35名であった。学生を３～４人を１組としたグループ（計10組）に分け、それぞれのグループに模擬保育を実施させ、その内容についてグループ内ディスカッションを行わせた。

2．模擬保育について

学生には、授業内オリエンテーションにて事前に運動遊びを題材とした模擬保育の指導案作成および実施の旨を伝えた。保育者役を担当するグループ以外の学生は子ども役として模擬保育に参加する形式とした。また、模擬保育を行うにあたって、保育者としての観点や保育上の留意点を説明した。模擬保育の時間は30分を設定した。天候の影響を排除するため、実施場所は体育館に統一した。各授業回で１グループが模擬保育を実施した（全10回）。自身のグループが模擬保育を実施する３日前までに指導案を作成・提出してもらい、実施日当日に担当教員が受講生分を印刷・配布した。

3．グループ内ディスカッションについて

模擬保育を用いてアクティブラーニングを進めていく場合、単に模擬保育を実施して終わるのではなく、実施された内容について様々な観点から意見交換が行われることで、保育者役、子ども役双方の学びに繋げていくことができると考えられる。そこで、各グループの模擬保育が終了した後、個人で模擬保育の内容に関する評価シート（資料１）に記入してもらった（所要時間10～15分）。その後、グループ毎に集まり、グループディスカッションを実施してもらった（所要時間10～15分）。その際、「良かった点」、「もっと良くなる点」、「具体的な改善策」といった内容を検討してもらうためのシートを配布し、そこに記入する形式を採った（資料２）。

4．調査方法および調査項目について

全グループの模擬保育およびディスカッション（計10回）が終わった後、模擬保育およびディスカッションに関する質問紙調査を実施した。調査を実施する前に、記入内容によって個人の特定や成績評価への影響等の不利益を被ることがない旨を伝えて、調査への同意を得た。

質問項目は、「本授業で行った模擬保育やディスカッションは、他の授業と比べて自発的に参加できましたか（Q1）」、「本授業で行った模擬保育やディスカッションでは、多くの意見やアイデアを取り入れましたか（Q2）」、「本授業で行った模擬保育やディスカッションにおいて、他者と協力して取り組

4）文部科学省　2018　教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究　初等中等教育局教育課程科

模擬保育　個人評価シート

保育担当班：

① 保育の流れはどうだったか（時間配分や活動のつながりなど）

あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4

② 保育の内容はどうだったか（導入，活動内容など）

あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4

③ 安全管理はどうだったか

あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4

④ 子ども（学生）への対応はどうだったか（声かけや指導・援助など）

あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4

⑤ 役割分担はどうだったか

あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4

⑥ 今回の保育で良かったと感じた点

⑦ もっと良くなると感じた点

資料１　模擬保育　個人用評価シート

めましたか（Q3）」、「本授業で行った模擬保育やディスカッションについて、初回と比べて最終回の方が積極的に参加できるようになりましたか（Q4）」、「本授業で行った模擬保育やディスカッションで新しい知識や考え方が身に付きましたか（Q5）」、「保育者を目指す上で、本授業で行った模擬保育やディスカッションは役立つと思いますか（Q6）」の全６項目であった。いずれの項目におい

この模擬保育、こうしたらもっと良くなるよ！シート

年　月　日

（　　）班

① どういったところが良かった？

② もっと良くなると感じたところは？

③ 私たちならこうするね！を教えてください

資料 2　グループ内ディスカッション用シート

ても５件法で作成し、自身の考えと合致するものを選択する形とした。

加えて、今回の授業の内容について、最終授業回に学生数名に対して個別に今回の授業内容について口頭で質問し、回答してもらった。

5．統計処理

5件法について、最も否定的な選択肢を1、最も肯定的な選択肢を5として、各選択肢の回答数を集計した。併せて、各質問項目において回答数に対する各選択肢の割合も算出した。

Ⅲ　結果

表1に各質問項目の回答に関する基本統計量を示した。最小値について、Q1とQ3においては1、Q2、Q4～Q6においては2であった。一方、最大値はいずれの質問項目も5であった。平均値については、いずれの質問項目も4を越えていた。加えて、中央値はQ4が4、それ以外の質問項目において5であった。

図1に各質問項目における回答数のヒストグラムを示した。いずれの質問項目においても、否定的な選択肢1または2と回答した学生は0～1人であった。一方で、肯定的な選択肢である4または5と回答した学生は、いずれの質問においても合計30人以上であった。加えて、Q2、Q3、Q5およびQ6の質問項目において、最も肯定的な選択肢である5を回答した学生が20人以上となった。

図2に各質問項目における回答数の割合を示した。いずれの質問項目においても否定的な選択肢の割合は3％であった。一方で、肯定的な選択肢の割合はいずれの質問項目でも90％を越えていた。最も肯定的な選択肢である5の割合についてQ3では74％、Q6では88％を占めていた。

表1　各質問項目における基本統計量

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
度数	35	35	35	35	35	35
最小値	1	2	1	2	2	2
最大値	5	5	5	5	5	5
平均値	4.43	4.51	4.63	4.14	4.6	4.83
中央値	5	5	5	4	5	5
標準偏差	0.815	0.702	0.808	0.692	0.651	0.568

Ⅳ　考察

本研究の目的は、近年、学校教育現場で求められている主体的で協働的な学習を実施していくために、模擬保育を用いたアクティブラーニング型の授業を展開し、保育者養成における活用法について事例的に検討することであった。本研究では、学生に運動遊びを題材とした模擬保育を実施させた。この模擬保育において、学生はグループで計画立案、役割分担、準備、実践といった展開の中でお互いに意見を出し合い作り上げていく。そのため、学生は模擬保育のみでもアクティブラーニングという学習の形を経験することができる。それに加えて、授業内で実施した模擬保育についてディスカッションを通して評価・考察し合うことで、保育者役の学生は自己評価と他者評価の即時的な擦り合わせを行うことができ、子ども役の学生は自身の担当回に向けて内容を参考にすることができる。これらのことから、模擬保育とディスカッションを組み合わせて実施していくことで授業全体を通してアクティブラーニングという学習形態を展開することができ、学生の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことが可能になると考えられる。

そこで、本研究では最終グループの模擬保育およびディスカッションが終わった後に、これまでの模擬保育とディスカッションについて質問紙調査を実施し、6項目の質問に回答してもらった。その結果、いずれの質問項目においても非常に肯定的な回答が多かった。Q1～Q3については、『高大接続改革答申』（文部科学省、2014）の中で学力の三要素の一つとして示されている「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に対応する質問項目となっている。いずれの質問項目においても、最も肯定的な選択肢である5の回答数が多かった（図1、2）。これらのことから、本研究で用いた模擬保育とそれに関するディスカッションは、文部科学省の示す「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養っていくことができると考えられる。

次に、Q4への回答については、4を選択した学生が最も多かった。Q4は「本授業で行った模擬保育やディスカッションについて、初回と比べて最終回の方が積極的に参加できるようになりましたか」という質問内容で、アクティブラーニング型の授業を実施していく中で学生自身が変化を実感できたかどうかを確認するために設定した質問であった。ほとんどの学生が初回と比べて模擬保育やディスカッションに対して積極的に参加できるようになったと回答している一方で、3（どちらでもない）を選択する学生が他の質問項目よりも多いように見受けられた。本研究で用いた模擬保育は、題材と時間を統

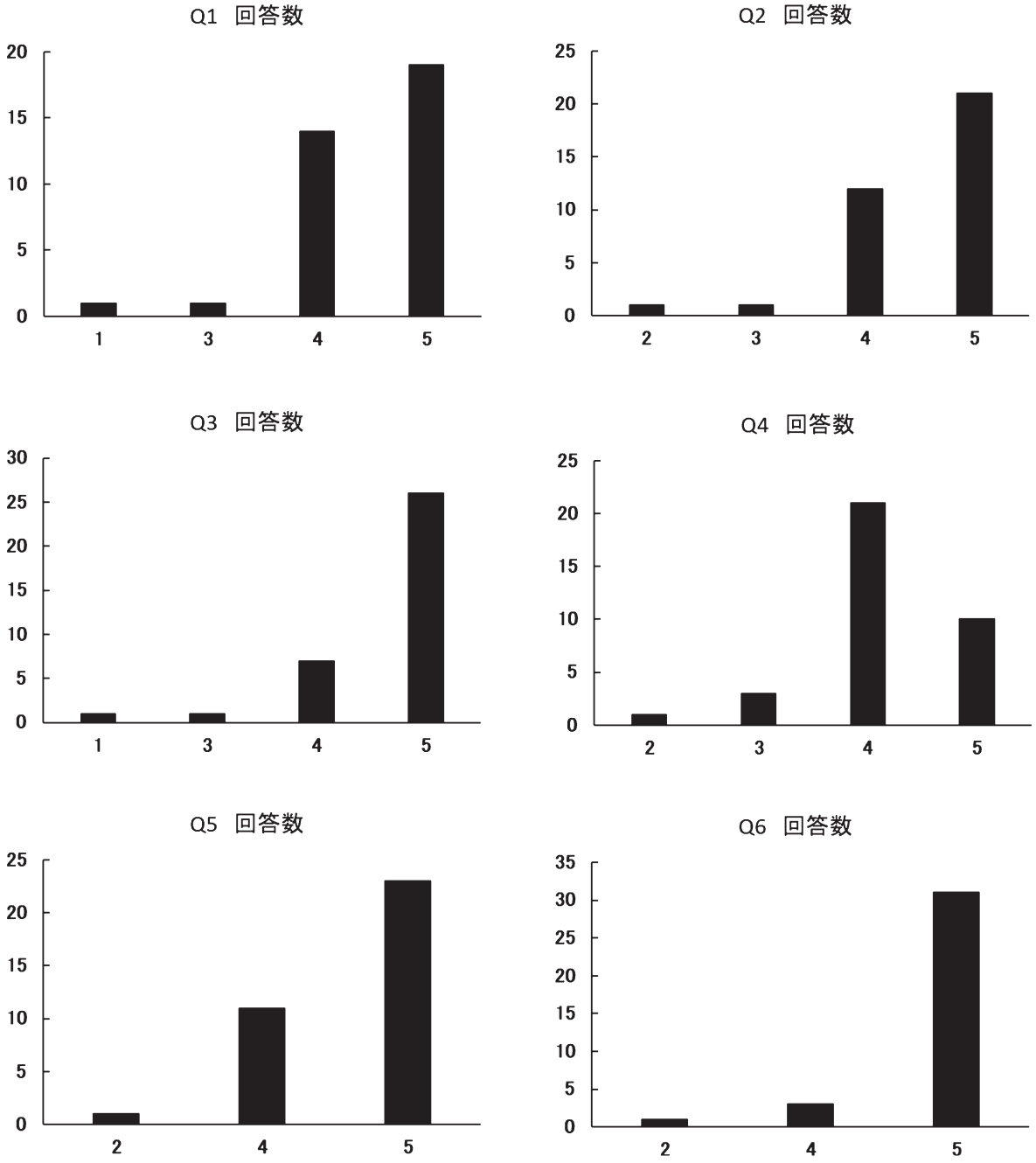

図１　各質問項目における回答数のヒストグラム

一して実施させる形であった。加えて、グループ内でのディスカッションも全ての回において同一メンバーで実施した。そのため、模擬保育中の活動の流れや同じメンバー同士でのディスカッションにマンネリを感じる学生の可能性が挙げられる。実際、最終授業回に学生数名に対して個別で授業の内容について質問したところ、ディスカッションのメンバーが変わらないことについて指摘された。これらのことから、模擬保育とディスカッションを組み合わせて授業を実施していく際は、模擬保育の時間や題材の自由度を高く設定することやディスカッションのメンバーを定期的に変更していくことでより深い学びに繋がっていくことが考えられる。

深い学びに関して、Q5 において新しい知識や考え方が身に付いたかどうかについて質問を設定した。その結果、身に付いたと考える肯定的な回答が97％であった。このことからも、他者と協力して何かを作り上げていくことや様々な観点から意見交換することが学習者の学びに良い影響を与えることが推察される。

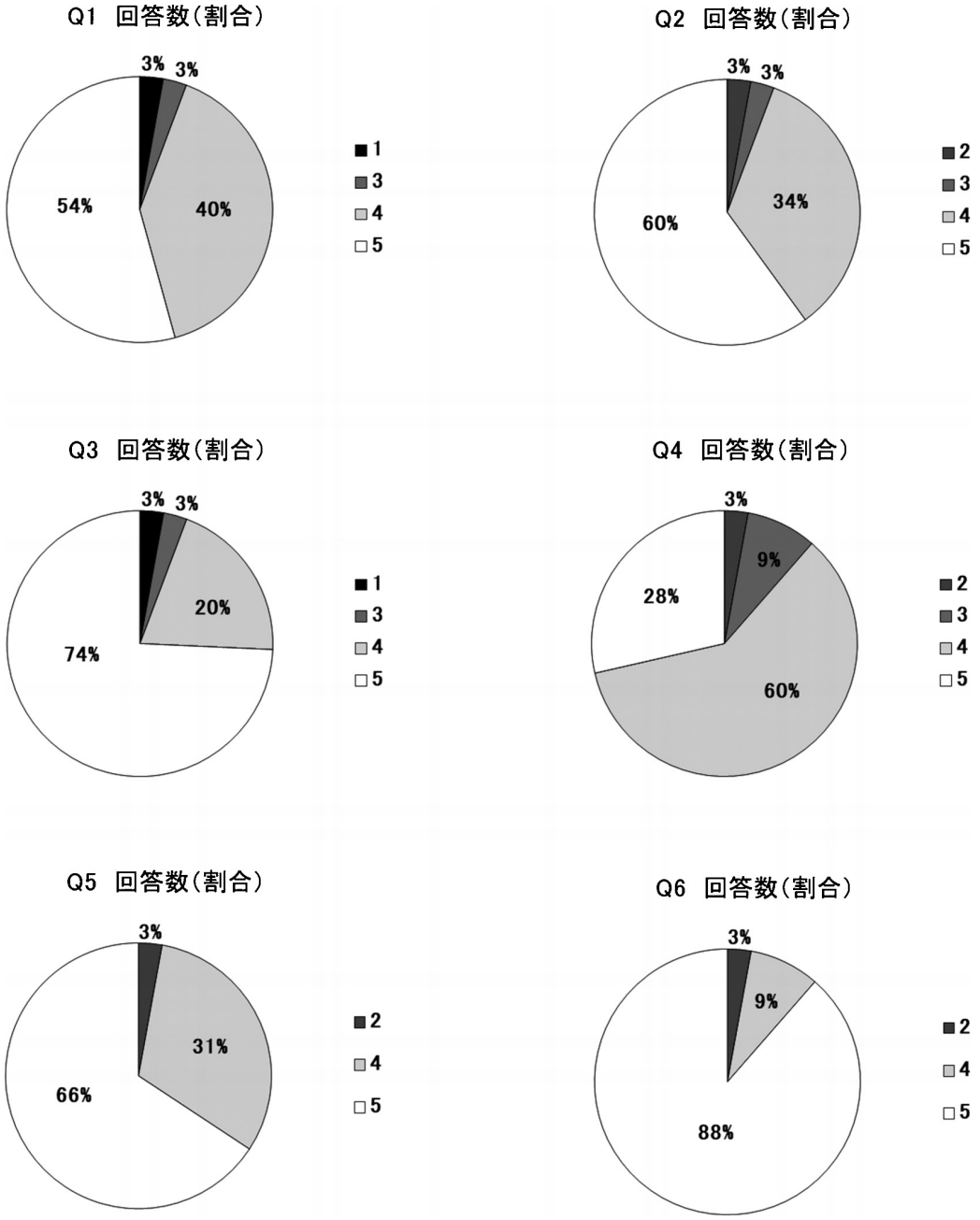

図２　各質問項目における回答数の割合

Q6は、アクティブラーニング型の授業が保育者養成において必要性が高いかどうかを確認することを目的として設定した。その結果、88%が非常に役立つと回答した。このことから、アクティブラーニング型の授業は、保育者を養成していくにあたって非常に有益な学習形態であると言える。学生数名に個別で具体的にどのように役立つか聴いたところ、「実際に他者と協働すること」や「模擬保育やディスカッションで経験した内容を現場で生かせること」といった意見が出た。保育者は、他の保育者と協働して子どもと関わっていくことが求められる職業である。同じ子どもであって、観点が変われば子どもの捉え方は変わってくる。その際、他者とどのように情報共有し、どういう形で保育に反映させていけるかアイデアを出し合うことも考えられる。そのような実際の保育現場で他者と協力して働く上で、円滑に進めていくための姿勢・態度や方法を考えるきっかけになったとのことであった。また、今回の授業で経験した内容が保育現場、特に実習の際に役立つとのことであった。実習では、学生が子どもの前に立ち、学生自身で保育を進めていく場面が往々にして存在する。その際、過去に人前で保育を

行った経験や他者に良かった点や課題を指摘してもらう経験の有無は、学生の心理的負担に大きく影響することが考えられる。加えて、事前に自分の強みや苦手なことを自覚しておくことで、実習に向けての具体的な対策を立てていくことが可能になる。

以上のことから、今回の模擬保育とディスカッションを用いたアクティブラーニング型の授業形態は、保育者養成において保育現場に出る際、特に実習に向けての準備を整えていく上で有益である可能性が示された。その際、模擬保育の題材や時間、ディスカッションの形式を様々に設定することで、学生がより深い学びに繋げていくことができると考えられる。

今後の課題としては、選択式の質問だけでなく、各質問項目の具体的な内容について記述式で回答してもらうことで、授業形態についてより詳細な検討が可能になると考えられる。また、このような授業形態の経験の有無が学生の実習での振る舞いにどのような影響を与えるのかについて検討することで、質の高い保育者養成に関する知見を得ることができると考えられる。

Ⅴ　要約

本研究は、学校教育現場で求められている主体的で協働的な学習を実施していくために、模擬保育およびディスカッションを用いた授業形態を実施し、その活用法について保育者養成の観点から事例的に検討することが目的であった。

対象者は、保育を専攻する女子短期大学生で「体育」の授業を受講していた35名であった。学生を３～４人を１組としたグループ（計10組）に分け、それぞれのグループに模擬保育を実施させ、その内容についてグループ内ディスカッションを行わせた。全グループの模擬保育およびディスカッション（計10回）が終わった後、模擬保育およびディスカッションに関する質問紙調査（６項目、５件法）を実施した。

その結果、いずれの項目も肯定的な選択肢である４および５の回答がほとんどを占めた。このことから、今回用いた模擬保育とディスカッションの組み合わせはアクティブラーニング型の学習形態として、学生の主体的・対話的で深い学びを促せる可能性が示された。加えて、保育者養成の観点から学生が保育現場、特に実習に向けての準備を整えていく上で有益である可能性も示された。これらの知見は、質の高い保育者養成に向けた授業を考える上で重要だと考えられる。

参考文献

文部科学省（2014）「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」 中央教育審議会答申
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf （2019年２月20日）

文部科学省（2016）「高大接続システム改革会議「最終報告」」 高大接続システム改革会議
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf （2019年２月20日）

文部科学省（2016）「主体的・対話的深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について」 教育課程部会・高等学校部会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/073/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/05/31/1370946_12.pdf （2019年２月20日）

文部科学省（2018）「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」 初等中等教育局教育課程科
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1401806.htm （2019年２月20日）